

『言いなり』
著：丸木文華
ill：minato.Bob

シャワーを終えてスウェットの上下を着た状態で、髪をタオルで乾かしながら居間に戻ると、トランク一枚になった剛が布団の上で携帯をいじっていた。髪は乾きかけてだんだんいつものような鳥の巣になってきている。

六月に入って少し汗ばむ程度だったが、この狭い部屋に熱量の塊のようなでかい男がいると一気に温度が上がったように思えて、圭一はたまらずに今年初めてのクーラーをつけた。

「お前さ、その髪だけでも何とかしたら？ ちょっと切りに行けばだいぶマシになると思うんだけど」

「そうかな。なんか、面倒でいつも自分で適当に切っちゃうけど」

「ほんと、もったいねえよ、お前」

思わずばやいたのは、初めて見る剛の肉体美に不覚にも見とれてしまったからだ。グラビアか何かで撮影された南米のサッカー選手が、丁度こんな体をしていたかもしれない。張り出した見事な胸筋、綺麗に割れた腹筋、太く逞しい腕は獰猛に見えて、なるほどこんな凶暴な筋肉をしていたら、ちょっと力を入れて掴めばヒビも入るだろうと思えた。

太腿やふくらはぎも丸太のように太く、競輪かスピードスケートでもできそうだ。まるでアスリートのように鍛え抜かれた肉体をしている。

「ジムとか通ってんの？」

「いや、そんなことしてないけど。体は動かしてないと気持ち悪いから、家で軽くトレーニングはしてるかなあ。時々外走ったり、あと、週末は昔から行ってる道場で稽古したり」

「あー、そっか。空手とか習ってたんだっか」

「うん、そう。俺、すぐ筋肉ついちゃう体質だから、ほどほどにしないとますます着られる服がなくなっちゃうから気をつけてるんだけどね。兄貴たちも親父も同じような感じだからさ、もう仕方ないんだけど」

気のせいかな、今日の剛はよく喋る。というか、こんな風に二人きりで喋ったことなど今までにないかもしれない。

圭一はミネラルウォーターをグラスに注いで飲みながら、まだ少し酔いの残る頭で剛の家族のことを考えている。

「そういえば、お前って、母親いないとか言ってたっけ」

「うん。俺が小学三年のときに、病気でね。その後、父さんは再婚したんだけど、婿養子でさ。連れ子の俺たちはなんか肩身狭くて……まあ、その後また色々あって、離婚して」

「そっか。なんか、大変だったんだな」

のほほんとした剛からは想像もつかない複雑な家庭環境に、少し同情する。圭一は引っ越しばかり繰り返してはいたが、家庭はいたって普通で平和だったし、家の中で不満を感じたことはほとんどない。思えば、反抗期などというものも兄妹揃って縁がなかった。

「親父は大変だったと思うな。俺、ちょっとグレちゃったときあったし」

「お前があ？」

思わず笑った。「全然、想像つかねえ」

剛も笑っている。

「ほんとだよ。あの頃はどうかしてた。やっぱり、不良ってやつなのかな。中学のときとかひどかったよ。毎日親父や兄貴たちと殴り合ってた」

「うひゃあ。お前みたいなのが何人も暴れたら、相当近所迷惑だろ」

そうかもね、と剛は肩を竦める。

「ぶん殴られまくって、ようやく目が覚めたかな。お陰で、高校はマジメに通ってた」

「そうだよな。そうじゃなきゃ、うちの法学科なんて入れねえし」

当たり前だが、剛にもここまで来る過程で色々なことがあったのだ。今は温和に見えるが、昔からそうだったわけでもないだろう。安堂の腕を掴んで怪我をさせたときの、あの不気味な迫力を思い出し、圭一は背筋を凍らせた。普段怒らない奴が怒ると異様な恐ろしさがあるが、今思えばあの剛の殺気は昔取った杵柄だったのだろうか。

「ケイ君ちは、どうなの？ 何人兄弟？」

「妹がいるよ。十五歳。両親と広島にいる」

急に剛は顔を輝かせ、身を乗り出す。

「ケイ君に似てる？」

「いや、全然。俺が母親似で妹は父親似だから」

写真見るか？ と聞くと頷くので、携帯の中にあった妹の桜の写真を見せてやる。

すると、剛は露骨に落胆した表情を見せた。

「ほんとだ、全然似てないね。ケイ君と兄妹だなんて信じられない」

「まあ、よく言われるけど。お前、なにガッカリしてんだよ」

「ごめん。ケイ君くらい美人な子想像しちゃった」

ムツとしたが、本人に自覚がないので怒っていいものかわからない。

「お前、もしかしてまだ酔ってる？」

「いや、大丈夫だと思うよ。水もいっぱい貰ったし」

「そっか」

剛の顔を観察するが、居酒屋でテーブルに突っ伏していたときよりは、確かにマシになっている。まだ目はとろんと濁っているがだいぶ酔いは醒めたらしい。

「お前が潰れるのなんて初めて見たから、今日はちょっとビビった」

「俺も初めてだよ」

剛は少し照れたように笑っている。

「でも、なんだか、今日はケイ君が優しくて嬉しいな。潰れてみるもんだね」

どこまでも気楽な奴だ、と少し呆れる。

「俺はいつでも優しいだろ」

「嘘だあ。俺のこと、犬だと思ってるくせに」

内心、ギョツとした。本当に、剛は突然心臓を鷲掴みにするような鋭い言葉を投げってくる。

確かに皆犬だと言っていたし圭一自身も剛をそう形容していたけれど、まさか本人から直接突きつけられるとは思わなかった。

「俺さ、今日だって、安藤先輩がトイレから戻ってきたらケイ君にまた飲ませようとか言ってたから、俺が代わりに飲むって言って、それで潰されたんだよ。ケイ君の代わりに飲んだんだ」

「そりゃ……悪かったな」

「別に頼んでない、とか思ってるでしょ。そうだよ、俺が勝手にやったんだよ。俺、ケイ君に言われなくたってケイ君を守りたいんだ。何だってするよ。犬って言われてんのだって知ってるし、笑われてんのも知ってる。でも、ケイ君の側にいられるなら構わない。ケイ君の役に立ちたいから」

剛はねつい調子で言い募る。腹を空かせた犬が媚びるような目で見上げてくるように、圭一を一心に見つめている。

思わず、唾を飲んだ。剛にこんな風に迫られたことなどなかった。

パシリにされても、公開オナニーさせられても、何食わぬ顔で圭一の側で尻尾を振っている犬だったのに、突然人間になって自己主張を始められて、不意打ちをかけられたようにまごついた。

もしも笑われているのも馬鹿にされているのも、何もかもわかった上で、圭一の側にいたいからという理由だけでサークルに残っていたのなら、剛はただの鈍感な人間ではなく、凄まじい執念を持っていたということになる。

その情念の、執着の深さに、圭一は怯えた。なぜそんなにも圭一にこだわるのか。そのことがわからないから、恐ろしい。

「なんだよ、今更なこと言って。ご褒美でも欲しいのかよ」

ご褒美、と剛は繰り返す。

すぐに、今のは失言だったと悟るが、もう遅い。

「そりゃ、欲しいよ。くれるなら、ちょうだい」

今すぐちょうだい、と迫られて、圭一は後に引けなくなる。

「何が欲しいんだよ」

「わかってるくせに」

粘ついた視線に絡めとられる。血が逆流したように一気に頬が熱くなり、動けなくなる。バスルームで感じた緊張感が再び全身にまわりつく。

これは、『そういう』雰囲気だ。

「こんだけしてるんだもん。普通、わかるよね。俺、ケイ君ばかり追いかけてるし」

「お前、マジで、俺のこと、好きなのか」

「そうだよ。初めて見たときから好きだった。一目惚れだよ」

はっきりと口にされて、凍りつく。

こんな風にきっぱりと告白されるとは、思わなかった。出会ってから二ヶ月。剛からの好意は嫌というほど感じてきたし、周りもあいつはお前が好きなんだと言っていたけれど、本人が何も言わないのはいいことに圭一は素知らぬ振りでも過ごしてきた。

けれど、もうそれも叶わない。いよいよ逃げ場がなくなってしまふ。

「お、お前って、ホモ、なの」

「わかんないけど、男はケイ君しか好きじゃない」

「俺のことが好きならホモだろ。女じゃねえんだから」

「じゃあ、そうかもね。別になんでもいいけど」

剛は布団の上に手をつけて、にじり寄ってくる。つられて、思わず後退る。けれどすぐに背中が壁に当たって、追い詰められる。こんな狭い部屋の中じゃどこにも逃がれようがない。

「ケイ君が俺のこと何とも思っていないのなんて、知ってるよ。犬としか思っていないもんね。だから、付き合ってもらおうだとか、好きになってもらおうだとか、別に考えてない。『ご褒美』で十分」

「それ……人として間違ってるねえか」

「ケイ君は、本気で誰かのこと好きになったことないから、わかんないんだよ。俺はこれでいい。だって、元々望みなんかもないもん。ケイ君は女の子と遊んでばかりだし、俺のことは犬扱いするし。だから、犬のいちばんの幸福が貰えればいい。それで上出来だよ」

究極のポジティブ思考だ。人のプライドを捨てても犬のご褒美が欲しいだなんて、確かにそこまでの情熱を圭一は感じたことがない。

気づけば、圭一に迫る剛の股間は膨らみ、トランクスを大きく押し上げている。それに気づいた瞬間ギョッとて、悲鳴を上げそうになる。

「お、お前、おっ勃ててんじゃねえよ、馬鹿！」

「だって大好きでたまらない人がご褒美くれるって言うてるんだよ？ 興奮するに決まってるじゃん」

「お前は羞恥心とか持てよ。何でそんな堂々としてんだよ。マジで犬だよ」

「ケイ君が犬扱いするから、本当に犬になっちゃったのかもね」

勃起していることを指摘されても、剛はまるで恥じる様子がない。（こいつ、本当に犬だ。人間捨てやがった）と呆れている間に、腕の中に閉じ込められる。

「お、おいっ。待て。犬なら『待て』できんだろ！」

「待てたらどんなのエサくれるの」

噓せ返るほどの欲情した男の体臭に包まれて、パニックになりかける。剛の肌は、乾いていて熱い。まるでタイヤのような質感だ。なめし革のような分厚い皮膚はちょっとやそっとじゃ傷もつきそうにない。

ふと、過去の嫌な記憶が頭をよぎる。けれど、あのときはこんなにも圧倒的な体格差や力の差はなかった。まだ男になりたてのような体同士で、遊びの延長のようなセックスをしていただけだ。

今のこの状況は、獰猛な肉食獣に食われる寸前かという危機感を覚えるほど、緊迫した空気がある。

（こんなでかい男に犯されたら、死んじゃう）

股間の昂りを押し付けられて、泣きそうになる。公開オナニーのときに剛が晒したあの巨根を思い出す。女でもどうかと思うものを本来その器官でない場所に受け入れたらどうになってしまうのか。つぶさに考えそうになって、かぶりを振る。想像したくもない。絶対に無理だ。

剛は圭一の言葉を律儀に待っているのだ。けれど、こんな興奮状態では、それもいつまで保つかわからない。圭一は精一杯の譲歩を提示する。

「わ、わかった。き、キスくらいなら」

「キスがご褒美？」

あからさまに不満な顔をされる。

「た、足りねえのかよ」

「ケイ君、ちょっとケチなんじゃないの。ガキじゃないんだからさ」

鼻で嗤われて、カチンと来る。しかしここで挑発に乗ったらおしまいだ。

「キスでも十分だろうが！ いきなり、そんな何もかもやるわけねえだろ」

「わかった」

切羽詰まった様子で、剛は唇を押し付けてくる。

どん、と鈍い音を立てて圭一の後頭部が壁に当たる。思い切り鼻柱に剛の眼鏡がぶつかり、前も後ろも痛くて、圭一は必死で顔を逸らして訴える。

「つ、剛！ 眼鏡、イテエ。外せよ」

「あ、ごめん」

剛は小さく呟いて、眼鏡を放り投げる。そのまま深々と唇を貪られて、圭一は息ができない。

こんな、激しいキスだったのだろうか、と考える。女とするのとはまるで違う、けれどあのときのキスもこんなにくるおしくはなかった気がする。

「はあ……ケイ君」

時折低く吐き出すように名前を呼びながら、剛は圭一の口を蹂躞する。太く長い舌を目一杯頬張られ、上顎の裏や、歯列や、歯ぐき、喉の奥の方まで、余すところなく舐め回されて、幾度も角度を変えられむしゃぶりつくので、まるで本物の獣に襲われているような気持ちになる。

「う、うう、つよ、し」

やめろ、ちょっと待て、と言いたいのに、言葉の先が続けられない。喋ろうとすると舌をきつく吸われ、顔を逸らそうとしてもどこまでも剛の唇がついてきて、結局舌を押し込まれる。

次第に、意識が朦朧とし始める。呼吸をしているはずなのに、酸素をすべて食い尽されているような気

がする。

こんなのは、キスじゃない。もろに口吸い、という感じだ。こんなに奥まで届くのかというほど舌を詰め込まれ、無理矢理唾液を飲まされる。剛自身の酔いは醒めていても、その呼気や舌にはまだたっぷりアルコールが染みついて、弱い圭一はそれに酔わされてしまう。

「ねえ、ケイ君触りたい。いいでしょ、触っても。いいよね」

荒い息の中、捲し立てられる。圭一が答えられないでいるうちに、大きな手がスウェットの下をかいくぐり、肋骨の辺りを撫でてゆく。

頭の中で赤信号が点滅している。キスだけのはずなのに、もうそれどころじゃなくなっている。頭がくらくらして、まともにものが考えられない。

剛の男臭い汗のにおいが立ち上り、靄のように圭一の鼻孔の奥まで湿らせる。深々と圭一の口を味わいながら、剛の大きな分厚い手の平は、腹を擦り、脇を撫で、乳首を摘んで執拗に転がす。

「うっ、うっ、ふう、う」

「ケイ君のおっぱい、可愛い。硬くなってきたよ」

おっぱいとか言うんじゃない、キメエ、と怒鳴りつけたいのに、出てくるのはおかしな声ばかりだ。女にも時々そこはじられるけれど、ささやかに刺激する程度だった。けれど、剛は違う。太い指でいつまでもしつこくそこを撫で、摘み、こね回す。自分でもそこがツンと勃ち上がって芯を持ち、充血してしまっているのがわかる。

「ああ、可愛いなあ。コリコリしてきた。ねえ、舐めたい。舐めていいよね。ケイ君のおっぱい、吸っていいよね」

剛は一応、圭一に伺いを立てるが、返事を聞こうとしない。スウェットを思い切り上にずり上げて、夢中で勃起した乳首にしゃぶりつく。

「うっ、こ、ら、剛っ……、あ」

強く吸い上げられて、腰の奥がきゅんと切なく疼く。剛の吸い方は容赦がない。欲望のままに舌を巻き付け、乳輪ごと頬張り、激しく吸い立てる。

同時に大きな手は下着の下に入り込み、硬くなったペニスを鷲掴みにする。

「うあっ、ああ」

これにはたまらず大きな声を上げると、剛は乳首を吸いながら嬉しそうに笑っている。

「ケイ君、キスとおっぱいだけで勃ったんだね。嬉しいなあ。本当に可愛い」

なぜそういちいち嫌な言い方をするのだろう。腹が立っているのに酒に酔ったように意識が濁って、ろくに抵抗もできない。

性急に荒っぽくペニスを扱かれて、思わず悲鳴を上げる。

「い、イテエよっ……力、強すぎるっ」

「あ、ごめん」

剛は照れたように笑いながら再び圭一の唇に吸いつく。

「興奮しすぎて、加減できてないや……痛かったらすぐに怒って……俺、暴走しちゃってる。だってケイ君の体初めて触ったんだよ。肌が柔らかくて綺麗。舐めたらケイ君の甘い味がするよ。ここも、可愛いし……全部可愛い。食っちゃみたい」

信じられないほど甘ったるい声で囁いて、器用に下着ごとスウェットパンツを脚から引き抜く。

ずるずると押し倒されて気づけば布団に横たわり、腰を抱え上げられ、いつの間にたぐり寄せたのか、近くにあったボディローションを指に取り、ペニスを扱きながら後ろの窄まりにも愛撫を加えようとしている。

「お、おい、剛っ……」

「大丈夫だよ。たくさん解すから。たっぷり時間かけるから。無理矢理突っ込んだりしないよ」

くそ、こいつ、最後までやる気だ。ご褒美はキスと言ったはずなのに、もうそれどころじゃない。

そう思いながらも、もうなるようになれと自棄になっている。どうせ言ったって引く気はないのだ。体格も力も数段上の男に死に物狂いの抵抗をしたとしても勝てるわけがない。労力の無駄だ。

それに、圭一は男に抱かれるのが初めての身ではない。もう何年も前のことだし、剛のものは大きすぎて恐ろしいけれど、逃げられるような状況でもなくなっている。力づくでやられて大惨事になるよりは、大人しくしていた方が傷は浅くすむだろうという悲しい打算も浮かぶ。

「うっ……、く」

「ああ……ケイ君の中、熱いね……」

濡れた指が侵入してくると、異物感到に総毛立つ。久しぶりの感覚だった。体がこの感覚を覚えていたことに内心驚く。一度経験すれば忘れられるような生易しいものではないけれど、この感覚を忘れてたくて女を抱いていたというのに、そんな努力もあっさり覆される。

「ケイ君の中だあ……ああ、すごいよ、動いてる……早く入りたい……ケイ君の中に入りたい……っ」

獣のような息の中で延々と繰り返しながら、剛はじりじりとそこを解して拵けてゆく。強引に太い指で粘膜を搔き回され、ローションのぐちゅぐちゅという濡れた音が股の間から響いていると、本当に女に

でもなったような気持ちになる。

「はあ、あ、うう、くそっ……」

涙の込み上げる目を必死で瞑り、曖昧な快感から逃れようと唇を噛む。

また、犯されるのか。女にされるのか。支配されるのか。

いや、違う。これは、自分が剛に与えてやっているんだ。自分が言いなりになって抱かれているわけじゃない。犬に請われて、ねだられて、仕方なく欲しいものを貸してやってただけなんだ。

「ううっ、ふう、うう、あ、はあ」

剛の指は的確に圭一の感じる場所を探り当てる。ペニスの裏側のしこりを強く押し上げられると、全身が蕩けてしまいそうに気持ちがいい。

「すごい、ケイ君のここ、すごい。硬くなるんだね。Gスポットみたいにわかりやすくなってきた。ああ、気持ちいいんでしょ。先走り垂れてるもん。ああ、すげえ、可愛い、最高」

剛が上ずった声でベラベラとうるさく喋っている。その間もぐりぐりと遠慮なく擦られて、あられもない声を上げてしまいそうになる。

汗が噴き出す。心臓がばくばくと騒いでいる。こんなに、ここは気持ちよかったですか。こんなに感じていたいですか。まさか、剛のやり方が上手いのか。

「ねえ、もう、いいかな。いいよね。指、こんなに入ってるもんね。もっとたくさん濡らせば、入るよね」

いよいよ我慢がきかなくなったのか、剛は嵐のような息を弾ませて、指を抜き取り、自身のものをローションにまみれさせる。脚を大きく広げられ、分厚い体のにしかかれる。

ああ、とうとう突っ込まれるのか。そう思うと、背筋を震えが走る。怖くてたまらないのに、わけのわからない興奮が込み上げる。

「い、入れるよ、ケイ君っ……」

言い終わるか終わらないかのうちに、尻に恐ろしいほどの圧力を感じ、ぐちゅりという形容し難い音と共に、そこがひどく大きく広げられる感覚が弾ける。

「うあっ……」

「ああ、きつい、すげえ、あ、ああ、ケイ君の中、ああ」

一瞬目の前が真っ白になった後に、視界がやけにクリアになる。間近にある剛の顔が汗に濡れて歪んでいる。眼鏡を外した剛の顔を、このとき初めてまともに見て、圭一は息を呑んだ。

眼鏡をかけていたときとはまるで印象が違う。こんな最中だからだろうが、噎せ返るほどの色気が滴り、覚えず顔が熱くなってしまふほどになまめかしい。

新鮮な驚きはすぐに尻の中に侵入してくる巨大なものの感覚に掻き消される。

ずん、と腹の奥を突かれて、圭一は声にならない声を上げ、胴震いした。

生理的な汗がにじみ出る。こんなに奥まで犯される感覚など知らない。

「ああ……全部、入ったあ……気持ちいいよお、ケイ君……」

ずっぷりと押し込んだまま、剛は恍惚とした表情で、深く圭一の口を吸い、舌を絡める。次第に馴染んでくると、じわじわと奇妙な快感が奥から込み上げてきて、わけもなく大声を出したくなる。

「ケイ君、ねえ、大丈夫？ 平気？」

「平気、なわけ、ねえだろうが……」

「でも、意外とすんなり入ったね……ケイ君、もしかして経験あるの？」

「こんな、でけえ、の、初めてだ、って」

「じゃあ、別のは入れたことあるんだ」

隠していても仕方がない。お前が初めてだと言って剛を嬉しがらせるのも癪だった。

しかし、ショックを受けるかと思った剛は、意外にも冷静な顔をしている。底光りのする目をして、圭一をじっと凝視している。

「ねえ、誰？ 俺の知ってる人？」

「お前は、知らない」

沢村の人のよさそうな顔を思い浮かべる。あんなに大きなトラウマになったはずなのに、その顔は輪郭も曖昧ではつきりと思い出せない。

そういえば、吉住の顔もそうだ。あの頃に関わった同級生たちの顔はすべてフィルタがかかったようにぼんやりとしていて、無理に思い出そうとすると頭が痛くなってくる。

嵐のように過ぎ去っていった中学二年生の夏の日々。あれは、本当に存在していたのだろうか。まるで夢のように頼りない記憶なのに、体だけはしっかりとその痕跡を留めているのが皮肉だった。

「ずっとずっと、昔の話だ」

本当に遥かに遠い記憶のような気がする。実際、まだ五年程度しか経っていないはずなのに、どうしてこんなに霞がかっているのだろう。

「俺、そいつのこと知ってる気がするよ」

そんなはずはないのに、剛は適当なことを言う。

「でも、今は俺がケイ君を抱いてるんだ。そんなやつのことなんか忘れさせてやる」

強い力で抱き締めると、剛は徐々に動き始める。

「くっ、うっ、あ、ふあ」

中を擦られると、どうしても声が出る。女と普通のセックスをしているときはほとんど声など出さないのに、体の奥まで犯されていると声が漏れるのを我慢できない。尻に直接性器を深々と入れられて揺すぶられているのだから当然なのかもしれない。

「ああ、いい、ケイ君、ケイ君っ」

剛は動いている最中もうるさく喚いている。腰を忙しなく動かしながら、犬のように圭一の顔中を舐め、飽きもせずにキスを繰り返す。

「んっ、んうっ、ふうっ、ふうっ」

ずっぽずっぽと奥の奥まで挿れ入ることを繰り返される。最奥を突かれる度に、剥き出しの神経を擦られるような、目も眩むほどの衝撃が弾けて、意識が混濁する。

「ねえ、ケイ君、奥、好き？」

「う、ふ、わ、わかんね、あ、あっ」

「だって、前のやつのは奥まで入らなかったんでしょ？ だから、ここは俺が初めてなんだ。奥の処女は俺がもらったんだ」

入り口の他にも、処女があるのか。いや、そもそも、男に処女などと言えるのだろうか。

突かれる度に意識が飛びそうになる。ケイ君、と呼ぶ声が昔の声と重なる。今、自分が誰に抱かれているのか、わからなくなる。

「ケイ君、ケイ君、ああ、可愛いよ、好き、好きだよ、俺のケイ君っ」

「ううっ、はあっ、ああっ、あう、う、つよ、し」

剛は疲れることを知らないようにいつまでも激しく腰を振っている。ぐちゃっぐちゃっ、ぶぽっずぶぽっ、と聞くに耐えないような音が連綿と鳴り響く。

あまりにも大きく忙しなく動くので、必死で剛の背中にしがみついていると過剰に揺すぶられて視界がぶれる。ケイ君、ケイ君、と呪いのように叫び続ける合間にやたらめったらに舌を絡ませ、上も下も粘膜が擦れ合って、そのうちに溶けてしまいそうだ。

「ああ、あああっ、ケイ君、ケイ君っ」

ひと際剛が大きく吠え、深く突っ込んだままぶるりと大きく痙攣する。途端に、奥に剛の夥しい量の精液が噴射され、ぶぽっと大きく音が鳴って肉の輪の合間から粘液が飛び出してくる。

「て、てめ……中に、出しやがったな」

「あ、ごめん、夢中で」

剛は赤い顔を汗みずくにして笑いながら、愛おしそうに圭一の口を吸う。

射精したにもかかわらず、中に入っているものは萎える気配を見せない。精液のぬめりを借りて抽送は一層楽になり、気づけば剛はまた腰を振っている。

「くそっ、ああ、もう、いやだ、剛、もう、っ……」

「ああ、気持ちよすぎて収まんないよ、ケイ君」

圭一の拒絶など聞かずに、剛は陶然と潤んだ目をしていつまでも動いている。

圭一は自分が射精したのかどうかわからなかった。ただ逃げようのない乱暴な快感に翻弄されて、剛にしがみついて喘いでいるしかない。

こんなにうるさく騒いでいたら、いくら防音がきいているとは言え、隣から苦情が来ないだろうか。そんなことを考えながら、圭一は剛の欲望を受け止めるのに精一杯で、なす術もなく、渦潮に飲まれて溺れるように、暴力的な絶頂感を全身で味わっていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>